

建築文化賞

ユニバーサルデザインに配慮した建築物

建築主：さくさべ坂通り診療所
設計：加藤武志建築設計室
施工：株式会社中野工務店
所在地：千葉市中央区椿森6丁目8番11号

「人生の最後を住み慣れたわが家で」をサポートする

さくさべ坂通り診療所



建物のプロポーションを低く抑えることで威圧感のない街並みになじむ外観デザインにしている。

多くの人は「最期を我が家で」と望むが、その8割近くは病院で亡くなるのが現状。その中「がんと診断されても、入院せずに治療を継続し、最期まで住み慣れた自宅での暮らしを続けられるように」、さくさべ坂通り診療所は、がんのホームドクターとして、がんと診断されたときから相談（セカンドオピニオン等）・治療を行う。そして終末期の緩和ケアまで、24時間・365日のサポート体制で医療・看護を提供している診療所である。

静かな住宅地の中、大きな標示板もなく、町並みになじんだ静かな佇まいの外観。草花の咲き乱れる花壇の中の蛇行する遊歩道、ウッドデッキ越しに見える広々とした居間空間。思わず気持ちがほっとする魅力的な「みんなの家」の風情だ。

「お邪魔します」と玄関に入る。左手に診療所の機能を満たす待合室、診察室、相談室、X線室が設けられている。右側の大きな扉の向こうは、杉の板と土や和紙の自然素材でおおわれた素朴でのびやかな居間空間。通常はデイホスピスの場として、また家族の集いや音楽会、レクチャー



アプローチは三和土でつくった緑の小道。

の場としても使われている。休みなく患者をサポートするスタッフの職場でもあり、くつろぎの場にも、と多目的に柔軟に活用されているようだ。

「がん」という病に特化しての診療所だが、真実を受容し、前向きに「自立して生きる」ことを支えてくれる診療所の存在は大きな安心だ。このような診療所が、私たちの地域にも、どこにでもあって、必要とするだれもが利用できるようになることを期待したい。

（夏目 幸子）



深い軒とデッキスペースが中間領域となって家の内と外をあいまいにつないでいる。

（撮影/垂見 孔士）